備陽史探訪
第73号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

# 志川滝山合戦の感状について

会長　田口　義之

以前刊行された藤井定市氏遺著『備南の懐古』の巻頭に、私の提供した滝山城址（加茂町北山）の写真等と共に東広島在住の飯田米秋氏所蔵の志川滝山合戦に関する一枚の古文書が掲げられている。天文二十一年（一五五一）七月二十八日付、毛利元就、同隆元連署の感状である。

内容は、毛利家臣渡辺源五郎の志川滝山合戦に於ける戦功を主君毛利氏が賞したもので、当時の感状原本として大変貴重なものである。

志川滝川合戦については、『備南の懐古』の中で藤井定市氏が詳細に考証されており、私のような後学の者がそれに口を挟む点は余りない。ただ一つ、著述されたのは戦後間もない昭和二十五年頃であって、以来三十余年、著者が目にすることが出来なかった史料で公刊されたものは多い。特に毛利氏側の感状等の古文書は、長州藩士所蔵史料集である、『萩藩閥閲録』の公刊によって利用しやすくなっている。以下、それらの感状を使って志川滝山合戦について私見の一端を披露してみたい。

現在、毛利氏が発給した志川滝山合戦の感状で確認できるものは次ぎの四通である。

。天文廿一年七月廿八日付渡辺源五郎宛（東広島市飯田米秋氏所蔵）

。同年　同月　同日付　渡辺小三郎宛（『萩藩閥閲録』二八）

。同年　同月　同日付　光永新四郎宛（『萩藩閥閲録』三五）

。同年　同月　同日付　三上民部丞宛（『萩藩閥閲録』一二八）

この四通の感状は文言から二種類に分けることができる。

一つは、渡辺源五郎、同小三郎、光永新四郎宛のもので読み下しは次ぎの通りである。

「去る廿三日志河切り取り候時、尾首構際に至り、初度に相い付け鑓仕り候、高名比類無し、感悦極り無く候、弥戦功を抽んずべき者也、仍て感状件の如し」

もう一つは、三上民部丞宛のもので文章は前掲のものとやや異なっている。

「去ぬ廿三日志川に於いて初度構際に至り指し寄せ、其方張行を以て合戦に及ぶ、太刀打ち高名誠に比類無く候、剰さえ鑓疵を被り候感悦更に極り無く候、忠賞怠り有るべからず者也、仍て感状件の如し」

両方を較べてみると、前者は内容が簡略で三通残っているのに対し、後者は一通のみで内容もやや詳しい。これは何を意味するのであろうか。

一つは、渡辺源五郎等と較べて、三上民部丞の働きが大であったことが考えられる。「其方の張行によって合戦が始まった」とあるから三上民部丞の突進によって合戦の幕が切って落とされたのである。

しかし、単にそれのみをもってこの違いがあらわれたとするのもどうであろうか。『備南の懐古』にも引用されている、『毛利元就同隆元連署軍忠状』の「或は疵を被り、或は討死の人数」の一番に記入されているのは他ならぬ渡辺小三郎であった（そして三上民部丞は七番目である）。この記入の順位がその戦功に比例しているとは断言できないが、最初に記入されているということは何等かの意味があったと見て誤りはない。そこで考えられるのは、渡辺小三郎等と三上民部丞の毛利家中に於ける立場の違いである。

渡辺氏は古くからの毛利氏の家臣光永氏は毛利氏の古い分家である。いわば渡辺氏等は毛利の「譜代」と言ってよい。それに対して三上氏は実を言うと備後宮氏の一門なのである。

同氏の系図（『萩藩諸家系譜集』所収）によると、宮下野守信忠が備後国三上郡（現庄原市南半）に住し、在名を取って「三上」氏を称したという。又、『藤姓三吉氏系図』（三吉町国郡志所収）にも宮太夫忠能の子忠秀の注に「三上」とある。藤井定市氏も述べられているように、室町時代の宮氏は非常に繁栄した豪族でその一族が三上郡に土着したとしても不思議はない。

志川滝山合戦に於ける毛利氏の敵は宮氏である。毛利氏に従った三上民部丞にとって同族を討つのは勇気を要することだったに違いない。反面この合戦で戦功を挙げることで、主君毛利氏に忠誠の証を見せようとしたであろう。

毛利元就という人は艱難の中に成長し、家臣に対しては非常に気を遣

った人である。渡辺小三郎等に比して三上民部丞の働きがそれ程際立つものではなかったにせよ、その立場を思いやり、他と違った内容の感状を与え、その功を賞したことは十分考えられる。この元就の気遣いがこれら二種類の感状を生んだのではなかろうか。

又、これらの感状を注意深く読むと、「尾首構際に至り」という文句があることに気付く。「尾首」とは山城の尾根続きの鞍部を示す言葉で、普通、山城の最大の弱点である。志川滝山城でも同様である。この城は北、東、南は絶壁状をなしているが西方尾根続きのみは空堀を設けただけで登はんは比較的楽である。そして、毛利勢はこの弱点を目がけて攻撃してきたことをこれらの感状は示している。

現在、滝山城へは西方滝部落から細い山道が続いている。歩いて行くと、城山を面前にして低い馬の背のような地点を通らねばならない。ここが滝山城の「尾首」である。ここで両軍勇士の血が流れたのであろうか。かつて郷土史の先輩が歩みながら思いを馳せたように、私も古文書をひもときながら四百余年の昔を思うのである。

# 土俗信仰としての盃状穴遺跡について

出内　博都

盃状穴とは鳥居、手洗鉢、灯籠、台石などの石造物や岩に、盃状の穴を人間の手によって刻まれたもので穴の大きさはさまざまで、大きいのは十二糎もあると言われ、深さもいろいろで八糎もあるものもあるようである。発生は古代からで古墳の葺石にみられ、山口市の神田山古墳の石棺の蓋石や、福岡県三雲遺跡の弥生前期の支石墓などの例があげられている。この付近では愛媛県生名村立石山麓出土の盃状穴石、安芸郡下蒲刈町の正善寺の手洗鉢などの例がある。

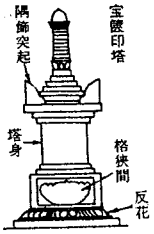
盃状穴は女性のシンボルをかたどったもので、呪術や土俗信仰と深くかかわっているという。盃状穴はその形状から生殖と子孫繁栄への願望を表わした性信仰の象徴であり、生産と豊穣を祈る民族信仰の一つであると言われている。この風習は大正頃まで行われていたらしい。因島市史料館前の燈明台は明治元年に建立されているが、台石に二十個の穴が認められ、明治時代までこの風習があったことが確認できる。

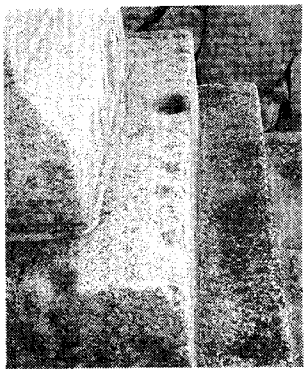
外国の例としては、スカンジナビア諸国、イギリス、フランス、フィンランド、中央アジア、シベリアなどがあげられる。朝鮮半島でも多く発見され、簡明に「性穴」と呼んでいる。生産と豊穣のシンボルとしての性穴信仰が土俗信仰として最近まで残っていたことが知られている。田舎の婦女子は男子出生を祈る時に陰暦七月の七夕に七つの性穴に栗を入れ祈ったのち、この栗を韓紙に包みチマ（はかま）の下にかくし下山すれば、男の子を得ると信じられている。また、スエーデンでは夜にバターをこの性穴に流しこんで祈れば、その年の農業と家畜の生産が高くなるなど、世界各地にいろいろな形で伝えられている。

以上は因島市文化財協会理事・田中稔先生のご教示をそのまま掲載させていただきました。さらに田中先生は因島市において六ケ所、百十二の盃状穴を紹介されています。

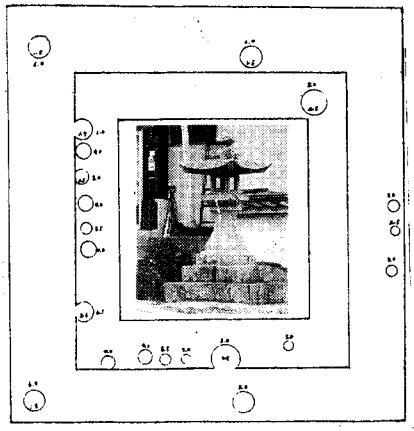
千田町では今のところ、小池集落の国道沿いの八幡宮常夜燈の台石と旧神辺街道の千田大峠にある宝篋印塔（刻経塔）の台座の二ケ所である。常夜燈のそれは、東側の常夜燈が大小さまざまで二十一個、西側にはわずか四個であり、千田大峠の宝篋印塔には大小四個ある。因島市のそれと比べて全般的に小さくて浅い傾向がある。東側灯籠の中で大きくて深いもの三個は台石の縁によりすぎて一部が欠落している。円形の中心と円周の関係からみて、後世に欠落したとは思えない。これでは液体は入れられないので、朝鮮半島の場合のように、供物は穀物が主体であったのではなかろうか。どの穴もきれいに磨かれており内側がなめらかである。何を願い、どんな祈りかたをしたのかわからないが、根気よく小さな穴を彫り、供物を入れる穴の大きさからみて、一回にほんのわずかの穀物を供え祈りを捧げたであろう。このように考えると何日かの日参形式であったのではなかろうか（一日分は小鳥がついばむことによって、追善供養となると考えたのであろう）。

因島市には享録三年（一五三〇）のものや天文年間（一五三二～）のものなど年代の古いものがあるが、千田の場合、安永三年（一七七四）と文化三年（一八〇六）と比較的新しいものである。





二段目台石の盃状穴群



千田八幡宮常夜燈台石盃状穴分布図

☆外数は直径　内数は深さ

# 光悦によせてⅡ

熊谷　操子

四月二日、念願であった洛北鷹ケ峯の光悦寺にやっとお詣りすることが出来た。とりわけ寒い日を選んだわけではないが、この日と決めてあったので、行住座臥の日々から思いきって脱皮したわけである。

家康から、

「辻斬りや追剥ぎの出る物騒な所を広く取らせよう」と、拝領した土地だけあって、現在でも相当交通の便が悪い。寒さも手伝ってか、目的地に着くまでにホトホト疲労困憊したというのが本音である。

その当時、日蓮宗のお題目が絶えず流れていたという法華題目堂は、現在では立派な日蓮宗の本堂になっている。いきなりパッチンパッチンという音が、スックと見事に立った北山杉の上の方から聞こえてくる。この寒空に植木職人さんが仕事をしてるのかしらと、あちこち見上げても見上げてもその姿は見えない。

ビッシリと生えた小さい笹が、光悦の創意になる巴池をこよなく美しく見せている。ふとその向こうに目を馳せると、

「見えた見えた光悦垣が」　思わずもう私は走っていた。

一見袖垣風でありながら、写真で見て想像していたよりも遥かにスケールが大きいのに唖然。息を飲む思いであった。賛辞は、その呑み込んだ息の奥に追いやられてしまった。長さ十八メートルは決してオーバーではなかった。右端の親柱の太さにびっくりして、すぐ外廻りの割竹（巾二センチ強）の数を数えてみた。四十五、六枚あったので、ざっと計算したのと、目測で直径三十センチはあるなあと、あらためて溜息をついた。玉縁も直径十四、五センチはありそうだった。本体の垣の高さの一番高い所が私の身長ぐらいだから親柱の最上部は到底見えない。割竹二枚合わせにした矢来垣風の組子は案外平面に近く、余程太い猛宗竹を使ったのに違いない。組子の交差点は細かい粽梱縄で結んであった。一段目の結び目は全部手前にあり、二段目は向こう、三段目は手前という風に交互に見せている。その細かい心遣いは、やはり芸術家光悦を偲ばせるのに充分であった。

内側から、この大きい垣を支えている丸竹は、まるで歌舞伎舞台の黒子のように、目立たない役をこなしていた。垣はだんだん低くなり最後は地に着いていたが、末尾には大きい樹の低い切り株が接していた。垣と共に年月を刻んで来た渋さを見せて捨て難い貌となっていた。

気が付いてみると、この垣の前に大きな床几がデーンと構えていた。撫でてみても埃は全然なかったのでホッとして腰を下ろした。いきなり暗くなってきた空を見上げていると、先程からのパッチンパッチンの犯人がやっと分かった。それは、竹数の大きい竹が強い風の誘いを受けて、北山杉の幹を思いっきり叩いているのであった。

とうとい雪が舞い始めた。けれども私はお構いなく床几の客となったままボーッとしていた。そしてその垣の向こうに、問題の書院式茶室の太虚庵があったことにやっと気付いたのである。ここで光悦が、松頼の釜に韻くのを、天地のこころとよみつつ茶の湯を楽しんだのだと、その姿を想像することが出来た。あくまでもその顔は俳優の〃大出俊〃であったことは言うまでもない。

太虚庵の少し離れた場所に、こじんまりとした親しみ易い草庵式茶室の了寂軒があった。きっと、古田織部と、亭主となったり正客になったりを繰り返しながら、切磋琢磨したに違いないと勝手に決めていた。

うっとりしている場合ではない。

観たい物がまだまだあったのだ。三巴亭・自由軒・騎牛庵・本阿弥庵等いくつかの草庵を急いで巡って見た。境内地は相当広いなとは思ったけれど、家康からこの地を拝領した時はもっともっと広大無辺ではなかったか。

光悦が亡くなる。当然求心力を失う。やがて光瑳（子）光甫（孫）の時代になってくると、家康との関わり等知らない金閣寺領の百姓が押し寄せてくる。そのうち醜い土地争いに発展する。延宝検地では鷹ケ峯の大部分をとうとう返上したという。

こんな事を以前何かで読んだことを、ふと思い出したからである。

宝蔵庫内で、江戸初期きっての文化人本阿弥光悦の作品にようやく出逢えた。大胆な意匠に仮名を散らし書きした見事なあの名作〃船橋蒔絵硯笥〃を、手に取るような場所で、あくことなく眺めることが出来た。寛永の三筆の筆頭と自他ともに許したという、その素晴しい水ぐきの跡もこの目でしかと確かめ、〃雨雲〃〃毘沙門堂〃等作陶の傑作に溜息をついた。時間が許すならずっとここでとも思いつつ、これら作品郡に傾けた光悦の情熱のほどを、しっかり覗き見た思いであった。

京都国立博物館や、京都文化博物館で、昨秋、光悦展が催されたのに折悪しく不慮の災難でどうしても行くことが出来ず、切歯扼腕の思いで過ごした日々、その無念の思いを、やっと見事に打ち果たすことが出来た京都の雪の日であった。

平成八年四月十五日　記

**歴民研からのご案内**

## 石造物分布調査説明会開催

歴民研では「歴民研もフィールドへ出よう」を合言葉に本年末から来年にかけて福山市加茂町周辺の石造物分布（記録）調査を行います。つきましては、左記の要領で石造物情報の集め方・調査カードの作り方・記録の仕方などを含めて学習会を兼ねた説明会を行います。興味のある方はぜひともご参加下さい。

**≪実施要領≫**

**日時**　十一月十六日（土）午後二時

**場所**　中央公民館視聴覚教室

**参加費用**　二百円程度

## 備前福岡ぶらり散策記

種本　実

赤穂線に乗って、「備前福岡の跡」を訪ねてみようと思いたったのは、五月五日から一泊で九州福岡へ家族旅行に行く計画を立てた際だった。

地名、博多と福岡はどう違うのか以前からの疑問だったが、家族旅行に備えて、旅行雑誌で福岡市の行楽地などを読んでいるうち、偶然その回答を得ることができた。

黒田官兵衛の子長政が、慶長五年（一六〇〇）筑前に封ぜられ、その居城を博多に築いたとき備前福岡を偲び福岡城と命名したことに由来するという。更に、官兵衛の祖父、曽祖父のものといわれる墓が、備前福岡の（以後、福岡と記す）妙興寺境内にあることからしても、近江は伊香郡黒田村を祖とする黒田家にとって福岡は深い縁があったと思われる。また、城下町岡山の基礎を築いた宇喜多直家、彼の父興家のものと伝わる供養塔も妙興寺にあるという。

大河ドラマ「秀吉」にゆかりの人物にまつわる土地であり、さらにローカル線の旅情も味わえるとあっては、これぞ〃垂涎の的〃と、時刻表と資料を眺めながら探訪計画を一気に立てた。

六月二日は、梅雨空は何処へやら、快晴のもと山陽本線、赤穂線と乗り継いで香登へ。駅員もいない正にローカルな駅の正面は緑豊かな田園、その突き当たりに丸山古墳を抱く小高い山が見える。国指定の古墳だが石室は埋め戻して見るものはないので二号線沿いに長船博物館へ。

「鍛冶屋千軒うつ槌音に、西の大名が駕籠止める」とうたわれたほど中世から多くの名工が出た刀剣の生産地の伝統は、刀鍛冶の実演と名刀を見学し垣間見ることができた。

長船から約一キロ、赤穂線と吉井川の間の平野を歩くと福岡の町へ着いた。河原のゴルフ場の中に残る福岡城址を堤から眺めて、町並を歩く。鎌倉中期、「一遍上人聖絵」に描かれている「福岡の市」はこの地だった。「南北に幅八メートルの二本の幹線道路が走り　その間を結ぶ道も碁盤の目のように町割が行われ、…」と記されてある資料を確かめるように、白壁や格子窓の昔風の民家が残る通りをそぞろ歩く。

「東小路」「西小路」「殿町」など由緒ありげな地名が今でも残っているのがうれしい。今では二つ残っている「七つ井戸」は、京から赴任してきた役人が設けたと言われる。

現在は格子がしてあって無論使用していない。この井戸に子猫が落ちたという逸話を、司馬遼太郎氏が「播磨灘物語」に記している。先日電話で御住職から伺った話によると―。

司馬氏が妙興寺の奥さんに取材したのは、昭和四十八年四月二十二日であった。この時は、古事に詳しい御住職は法事のため取材に応じられなかったという。司馬氏のほか、柴田練三郎、吉川英治など多くの作家がこの寺を訪れているとのこと。

宇喜多興家・直家父子が、福岡の豪商・備前屋阿部善定によって流浪中の鞆から福岡に姿を現したのは、天文四年（一五三五）三月である。備前守護代・浦上家の家臣宇喜多能家が砥石城で殺害されてから九ケ月になっていた。後に　秀吉の重臣にまでなった堺の商人・小西行長も少年時代にこの備前屋で奉公したという。直家の子秀家は五大老の一人となり、最後は八丈島の土となったのである。

天正元年（一五七三）、岡山城主となった直家は福岡の商人らを移住させ、岡山の城下町作りに着手した。その為かいま福岡には、かつての豪商たちのたたずまいは殆んど見られない。だが、黒田氏や宇喜多氏がこの地によって育まれたこと。更に歴史を遡れば観応元年（一三五〇）足利尊氏は、子直冬追討のため、大軍を率いて福岡に四十日駐留したのであった。また、応仁元年（一四六七）から十数年は、赤松・浦上氏と山名・松田氏の軍勢により福岡城の攻防が続いた。

このように、福岡は中央の歴史と深い関わりを持つ地であったのである。そんなことが脳裏によぎりつつ数百年前武士達は、商人達は、そして百姓達はこの路をそれぞれどんな思いを馳せながら往来したことであろうかと、往時を偲んだ。「備前福岡郷土館」では、突然の私たちの見学を歓待して下さり、冷たいコーヒは渇いた喉を一気に流れた。館長さんの三十分の説明の中にも、「草戸千軒と共に、中世から近世までの歴史においては、教科書にも登場する重要な地であったのです。今年の大学入試にも出たほどですよ。」とあった。

「福岡の市」の繁栄の跡に、静寂な初夏の風が舞い、抜けるように青い空、新緑の山脈に囲まれた備前平野には、水田と共に熟しきった黄土色の麦畑が何処までも続いていた。栄枯盛衰を肌で感じつつ、再び赤穂線にゆられた身体には、予定通りの散策に満ちたりた気分が宿っていた。

# 中央アジアの旅行記7

神原　正昭

## 青の都サマルカンド

シルクロードの旅で一度は訪れてみたい町サマルカンド、今日のガイドはズエロアーツさん（女性・旅行会社の社長）。

サマルカンドはパミール高原の一部で標高七二一m。冬はマイナス二〇℃、夏はプラス四〇℃程度になる。広さ一〇五平方Km、人口五〇万人。中東では最も美しい町として繁栄していた町で青の都ともいわれている。紀元前四世紀にアレクサンダーに攻略され一万人以上も殺され五世紀まで全くの死の町であったといわれている。次に八世紀のアラブの侵攻、さらに、一二二〇年モンゴルに攻略される、この時、町の中の人は町より出され大部分の人が殺される。その後、中央アジアの大征服者チムールが出現し彼の手によって大帝国ができ、その首都がサマルカンドである。

今日は十時三〇分に、ホテルを出発してアフラシアブ遺跡に行く。この遺跡は六～八世紀にソグド人が築造した、城塞都市で一九五八年以降に発掘され現在でも発掘を行っている。遺跡の丘の麓にある考古学博物館から見学する。博物館での説明はサユラさん（女性）。この人がこと細かく熱心に説明をしてくれた。

遺跡の発掘によって宮殿の跡が発見され貴重なものが出土している。当時の住人はソグド人で、この人達の宗教は、ゾロアスター教で火・地・水・空気を神聖なものとして考え、特に火を崇敬するので拝火教ともいわれている。人が死んだ場合風葬として、さらに土地を汚さないため、風化しない骨はオスアリという焼物に入れる。これらの遺物が多く有るこの博物館の圧巻は宮殿跡より発掘された、壁画の展示であった。『使節の行列』『三人の行列』『至福の海』など当時の様子がリアルに描かれて学術的にも高く評価されているものである。また、ソグド人の当時の生活の住居などが復元されていて大いに参考になった。

私達は、博物館を後にして丘の上にある遺跡にいってみる。今は茫漠たる丘であるが発掘した跡が残る。石畳の道路を通って頂上付近の拝火神殿跡があったらしい所に行って見ると、モンゴル軍によって滅ぼされた旧サマルカンドの住居跡から大量の人骨が、また、モンゴル軍の放火

の証しである赤い土の層・崩れたレンガ・炭化した木片などが、いたる所に出土している。

ソグド王の宮殿跡からは中央アジア各地からの貢ぎ物を持った使節がやってくる様子を描いた壁画が見つかっている。博物館で見た物。拝火神殿跡の志面なども残っている。往古中国まで出かけてシルクロードの商人として繁栄していたソグディアナの繁栄を感慨深く思う。

門と思われる所や発掘された跡、その周囲などを見学する。レンガの積んだ跡なども残っているが、レンガは日干レンガである。この遺跡で思ったことはモンゴル軍の攻撃がいかにすさまじいものであったか分かるような気がした。

昼食のためホテルに帰る。昼食の内容は、トマト・香菜・キュウリのサラダ、ヨーグルト、揚パン、ナン、羊肉のダンゴ・タマネギ・トマトの煮物、それと、ガラスの水差しに水のようなものが出てくる。生水が飲めないのに出ているのでみんな顔を見合わせると、ウォッカとのこと。ここでは昼食にウォッカを飲むのが一般的らしい。ここで数人がウォッカを飲む。私もその一人である。ウォッカのおかげで十四時からの見学は、雲の上にいるようである。「シマッタ」と思ったが後の祭である。団員の中にエジプトに長く住んでいた人が言うには、このような暑い所の昼食にウォッカを飲んでは、十五時まで休みということらしい。それ以前に動くのは日本人ぐらいだとのこと、それにしてもよく応えた。

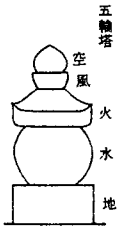
昼からの見学地グルエミル廟に行く。グルは墓、エミルは支配者。サマルカンドでも廟の青さは引き立って美しい建物で十四世紀末から十五世紀の初めにかけて造られたもの。チムール・チムールの息子・孫の墓を安置している所。ドームの天井の直径は十五mで高さ十二m、金や青で彩られていてイスラムの紋様が極めて美しい。チムールの石棺は蒙古から持って来たといわれる黒緑色の軟玉でつくられ一際目を引く。馬のしっぽで作られたものが飾りとして付いていた。チムールの孫のウルグベク王は天文学に詳しく、この王が造ったといわれる天文台にも行って見る。

一四二八年に作られた天文台は小高い丘の上にあり、その後破壊され現在目にできるのは地中の部分の弧が残っていた巨大な六分儀だけであり、高さ四十m、弧の長さ六三m、幅二mとその巨大さに驚いてしまう。私達が見学できたのは地中の幅二mの弧の部分だけである。この天文台の北側に小さな博物館があり、観測器具の模型や図が展示しており、この展示を見ると当時のことがよく分かる。

この天文台の近くにシャーヒジンダ廟があり、そこに行って見学する。ここは八世紀にアラブ侵入後のイスラム教徒の霊廟が建ち並んでいる所である。それぞれの時代によっておもむきが違っている。シャーヒ・ジンタとは生ける王という意味だということ。ここに祀られている人はマホメットの従兄弟というクッサム。チムール一族妻、姪、姉、妹、乳母、ウルグベクの恩師、子供などが埋葬されているといっている。

まどう階段という所があり、段数を数えてみると三十八段あり、なぜまどう階段というのか私は理解しがたい。

ここはイスラム教の霊廟であるがその一角にゾロアスター教の拝所があり不思議なことである。異教徒と同じ場所。サマルカンドは見学場所が多くあり次の機会に書いてみます。




**城郭部会からのご案内**

## 立石定夫先生追悼 矢筈城登山会 開催について

昨年六月に亡くなられた立石元福山市長は、著名な郷土史家でいらっしゃると共に、当会の顧問的存在でもいらっしゃいました。その立石先生が、生前、いつも口にされていた美作草刈氏の居城・矢筈城への登山会を開催致します。ふるってご参加下さい。

**《実施要領》**

**。日時**
十一月十七日（日）
午前七時四十五分福山駅北口集合
（福山キャッスルホテル前）

**。参加費**
会員　四二〇〇円
一般　四五〇〇円

**。募集**　四十五名限定

**。受付開始**
十月八日（火）より事務局へ

☆弁当飲物持参、山歩きのできる服装・靴でご参加下さい。

☆矢筈山城は峻険な山城ですので、この例会は健脚の方向きです。

# 夜道怪

佐藤　壽夫

小生、子供の頃、よく悪戯や無鉄砲なことをしていた。

悪がきというか、がき大将というか、とかく、やんちゃであった。

よく悪いことをすると祖母が大きな声で「ヤドゥカイがくるぞ」と口ぐせに叱られた。

また、裸で遊んでいると、「カミナリさんがオヘソを取りにくるぞ」とか、どこにでも男の子ですので、立ちしょんべんをしたものです。

するとこんどは、「おまわりさんが連れて帰るぞ」と、叱られたものです。

その頃、祖母が叱る言葉の「ヤドゥカイ」とはなにか分からないが、とにかく恐ろしいものだとは思っていた。

平成五年一月七日に福山市の巡回図書で司馬遼太郎氏の「新史　太閤記」を読んだ。その巻頭に、商人聖（あきないひじり）の見出しで小説が始まる。

夕景になると遠山がかすむせいか濃尾平野は哀しいばかりにひろくなる。この国は森と流れが多い。聚落に、尾張独特の淡く紅いもやがたちこめはじめ旅人たちの足は散るように早くなる。……の出だしで小説が始まる。

扮装は、宗教的行装をしている。みな自装をし、笈を負っている。諸国でいう高野聖どもである。

昔はかれらは、高野の弘法大師の功徳を宣布してまわり、その謝礼で暮らしていた旅行僧たちだったが、この乱世では形態がちがって来ている。経典のほかに商品を背負い、旅から旅へ売ってまわる、行商人になりおおせているものが多い。

この特殊な高野聖は、アキナイ聖とよばれていた。

聖とは、当節の語感からいえば中国でいう聖人というものではない。当時のみかた、呼び方では、乞食、物乞、浮浪者、他人の嫡盗といった語感に似ている。事実そういう生活形態の者どもであった。いわば今昔の感がある。

ヒジリといえばこの頃、尾張の農村では、「ヤドゥカイ（夜道怪）」とよんで警戒されたり、卑しまれたりする人達のことだった。

まったく文字面をみるだけにおぞましい連中で、うっかりヒジリに宿を貸すと、夜陰屋内をかさこそと這いまわって、宿の女房や娘を手ごめにしてしまう。中世は混乱のなかで終わろうとしている。応仁の乱、以後、戦乱の世も七十年を過ぎた頃のことである。……と物語は続く。

さて、わたしごとに話をもどします。子どもの頃に祖母に叱られた、「ヤドゥカイがくるぞ」の脅しことばが、私が六十一才になって謎がとけました。

祖母は紀州の生まれの人でした。（現在の和歌山県）なるほど、高野山もあるし、高野聖の発祥の地、アキナイ聖が紀州や濃尾平野を旅して諸人に被害を与えたことがこの地方の言葉として伝承され、祖母の父母また、祖母の祖父母によって語り伝えられ、そして私が子どものころ叱られた「ヤドゥカイがくるぞ」の祖母の声が今も耳に残っています。

古い言葉や伝承の語らいの場所も日常生活の中に少なくなり、祖父母から父母、そして子、孫、曽孫と伝え語られる時代が少なくなって参りました。

時の流れといわず、古い言葉や、伝承を語り伝えてゆくことが、私たち年代の務めであると思っています。

わからないことや、疑問なことは人様に教えていただき、また書物を読み勉強することです。そのことがその人の宝となり、教養を積むことであると思っています。

人の人生は何かを考え、周りの人達に何かを残してゆくことが私達の務めであると感じる昨今の日々です。

祖母の叱ってくれた「ヤドゥカイがくるぞ」の言葉に祖母の暖かい温もりを感じます。

おわりに、山本有三さんの詩を紹介いたします

『たった一人しかない　自分を
たった一度しかない　一生を
ほんとうに　生かせなかったら
人間に生まれて来た
甲斐がないじゃないか』

**郷土史講座のご案内**

**第十一回郷土史講座**

## 長和庄と長井氏について

今回の郷土史講座は、後に毛利氏の筆頭家老となる福原氏の祖・長井氏とその所領・長和庄の係わりについて、当会の小林定市さんにお話しして戴きます。ふるってご参加下さい。

〔日時〕　十一月三十日(土)午後二時
〔場所〕　中央公民館会議室
〔講師〕　小林定市氏
〔資料代〕　百円程度

# 高松塚再考

門田　幸男

九月十五日朝、近鉄の宣伝番組で高松塚壁画館が紹介されていた。発掘された時は国中の話題になっていたが、今はもう忘れ去られたように静かだった。しかし、一体誰の墓なのか解明されてはいない。当時、色々な学者先生が色々な推測をされていたが、そのもととなる理由のいくつかを列挙してみますと、壁画の人物の服装から持統天皇の治政時代の築造であるらしい事がわかる。（『古代国家と道教』　重松明久著）

遺骨から推測して葬られている人は壮年の男子だと言われている。この二つの条件に合致する人は、大津皇子・草壁皇子・高市皇子・弓削皇子の五人にしぼられる。発掘時の資料によれば、遺体には頭蓋骨が存在しないこと、それに埋葬されていた遺物の太刀は鞘の部分のみで刀身がないこと、その上に壁画の中で日像と月像、玄武像（言うまでもなく天皇家の象徴です）が故意に削りとられていることなどから天皇になる資格がある人なのに、死を賜わった人ではないかと梅原猛氏は、その著書『黄泉の大王』（新潮社刊）で言う。

そこで死を賜わった人物と言えば大津皇子が筆頭である。天皇になれる可能性が草壁に次いで高かった人物だが、姉の大来皇女が二上山を弟とみなす歌を歌っているから大津皇子ではないようです。

藤原京と天武持統陵を結ぶ線は聖なる線だと言われているが、高松塚はほぼこの線の上にあって文武陵より天武持統陵に近い事と、華麗な壁画がある事の二つからみて草壁皇子の可能性が高い。ただ生みの親が息子を殺すかと言う疑問と、真弓丘陵が草壁の墓だとする説もあるから断定するのは難しい。けれどもこの二人以外の川島皇子は天智の子であるから論外であるし、高市皇子は太政大臣になった人だから殺されることはなかっただろう。残った弓削皇子は殺されたらしいが、天皇になれる序列ではかなり遠い人のように思われる。

そこで天皇になれる可能性の高い大津と草壁とを比較してみると、大津が殺されたのは旧十月亥の月純陰の月で神無月と呼ばれるし、易で言う神為地である。草壁はどうかというと旧四月巳の月全陽の月で、易で言う乾為天である。このあまりにも対照的な死の時期は、企てられた死である疑いが濃い。自分の欲望をとげるのに邪魔なわが子には天に再生出来る日時（呪術的に）を選び、対立する大津にはあくまでも地に呪縛される事を念頭において、それぞれに死を与えたのが呪術の帝王持統ではなかったかと考えているのが吉野祐子先生です。（『持統天皇』　人文書院刊）「そりゃないぜ」という声が聞こえて来そうですが、福山女子短大学長だった重松明久先生も殺したとは言えないが、被葬者は草壁皇子だと推定しています。（『古代国家と道教』　吉川弘文館刊）その他の説としては、高市皇子説（原田大六氏等）、弓削皇子説（梅原猛氏）、忍壁皇子説（直木孝次郎氏）等があり、それぞれ理由があるのでしょうね。一体、高松塚は誰の墓なのか。自信のある人は教えてください。理由もそえてね。探訪の会には古墳部会がありベテランの方もいらっしゃるのですから。

〔追伸〕

「吉野先生の草壁皇子説を深く調べたい方には、『持統天皇』の本をお貸しします。重松先生の『古代国家と道教』もあります。あまり高いのでびっくりした記憶がありますが、探訪の会会員には参考になる論文だと思います。ご希望の方はお申出下さい。」

**【略年表】**

| 年代 | 出来事 |
|---|---|
| 西丁　686 | 天武天皇没　九月九日(実際と違う:吉野) |
| | 大津皇子没　十月三日(=上山) |
| 西丁　688 | 天武大内陵に葬る |
| 西丁　689 | 草壁皇子没　四月十三日(真弓丘陵?) |
| 西丁　690 | 持統即位　　高市皇子、太政大臣となる |
| 西丁　694 | 藤原京に遷る。 |
| 西丁　696 | 高市皇子没　　埋葬場所不明 |
| 西丁　697 | 文武即位　　持統太上天皇となる |
| 西丁　699 | 弓削皇子没 |
| 西丁　702 | 持統天皇没　(大内陵に合葬) |
| 西丁　705 | 忍壁皇子没　(知太政官事) |
| 西丁　707 | 文武天皇没 |

**【高松塚推定被葬者】**

| 推定被葬者 | 推定者 |
|---|---|
| 弓削皇子 | 梅原猛 |
| 高市皇子 | 原田大六、大浜厳比古<br>土淵正一郎、五味充子 |
| 忍壁皇子 | 直木孝次郎 |
| 草壁皇子 | 重松明久(福山女子短大学長)<br>吉野祐子 |

# 女三人大和路の旅

吉田　治美

昨年の秋、飛鳥・斑鳩の里を旅したあと、待ちこがれていた二度目の大和路の旅だ。資料作成係だった私は、出発までにすでにエネルギーを使い果たしてフヌケ状態。元気はつらつのスケジュール係Tと宴会係Mの後をついていけばいいやと、呑気に構えていたのが間違いのもと。

早くも天王寺駅でハプニング発生。未熟者が昨年秋の時刻表を使ったため、秋の臨時列車だった大和路線はあるはずもなく、待てど暮らせど電車はホームに入って来ない。王子駅から桜井駅を通ってすっと行けるはずだった三輪駅が、急きょ奈良駅廻りとなった。初めから京都経由で奈良へ入っていればよかったねと、反省しきり。（でも、この反省を次回に生かすような私達ではないと思うけど）それでも親切な車掌さんのアドバイスのおかげで、どうにか一時間程のロスで三輪駅に降り立った。

先ずは腹ごしらえと、雨の中を三輪そうめんで有名な老舗『千寿亭』へ行く。こういうチェックは得意の分野であるTのおかげで、おいしい昼食にありつけて幸せな気分になった私達。先ずはビールを注文。周りの視線が一斉にこちらへ。『アルコールはおいてません』の返事に、一瞬冷汗をかく。「卑弥呼さまに会いに行くのにアルコール混じりでは失礼にあたるわよね」と、ここはぐっと我慢。

『千寿亭』をあとに、しばらくテクテクと北上して、箸墓へ向かう。右手にこんもりと丸い緑の森が見え隠れし始め、まもなく箸墓の正面へ到着。雨に煙った箸墓。倭迹迹日百襲姫命の墓といわれていて、昼は人が造り夜は神が造ったと『日本書紀』に書かれている墓だ。卑弥呼の墓ではないかともいわれている。（私達はもうすっかり卑弥呼の墓だと信じきっている）。最近新聞等を賑わせていて、いやが上にもムードの盛り上がってきている墓だけに、「あああ」ついに卑弥呼の墓へやってきたぞ」と、ゾクゾクするような感動を覚えた。このまま回れ右して帰ったのではあまりに素っ気ないと思い、雨で濡れた夏草をかきわけながら古墳の裾野を1/4周ほどすると、池の堤へ出た。垣がしてあって、その向こうで釣糸を垂れている人達がいる。「あっ、入ってはいけない所へ入っている人がいる」とさわいでいたら振り返った所に札がぶらさがっていて、『立入禁止』と書いてある。「えっ？もしかして私達が不法侵入なの？」三人大あわてで垣をまたいで外へ。冷汗なのか。雨のしずくなのか。誰か見ていなかったかしら？「ごめんなさい．卑弥呼さま」

雨が激しいので、タクシーで大神神社へ直行。ここは延喜式内の大社では最も古い神社の一つで、祭神は大物主命（倭迹迹日百襲姫命のご主人）。御神体は三輪山で、酒と薬の神様としても有名らしい。雨にもかかわらず、参拝者や観光客で賑わっていた。この神社の付近一帯は、崇神天皇・景行天皇・仲哀天皇の勢力範囲であったといわれている。崇神天皇陵へは明日行く予定なので、そこでゆっくり崇神天皇に思いを寄せることにして、先を急ぐことにする。

これよりいよいよ山の辺の道に入るわけだ。三輪山の裾を歩いて行く道で．雨のせいか昼なお暗き林の中の山道が続く。少し不安になるくらい、道行く人には誰にも会わない。時折、樹間から三輪山が見え隠れする。しばらく歩いて行くと、東の空を背景にしてくっきりと三輪山が浮かび上がって見える地点に出た。

三輪山を　しかもかくすか雲だにも
心あらなむ　かくさふべしや

額田女王の詠んだ歌の解説を、さすが古文の先生らしくTがしてくれる。目の当りに三輪山を仰ぎ見ながら聴いていると、ぐっと胸に迫ってくるものがある。上ったり下ったりの続く山道を、傘を片手にとにかく前進とはりきっているMや私の後をこの道大丈夫なの？もう引き返した方がいいんじゃないの？と言いたげに、Tは遅れ気味についてきている。

玄賓庵を過ぎると道は一段ときつく細く暗くなり、まさに森の中へ入った感じ。さらに上り下りが続いてもうたくさんだ、どうにかして、と叫び出したくなった頃、桧原神社へ到着。崇神天皇が天照大神を祭った伊勢神宮の前身の笠縫邑とする説もあるということで、元伊勢とも呼ばれているという。神社の前の茶店で一休み。話好きのおばあさんとしばらくおしゃべりをし、帰り道なども教えてもらって出発。

神社のすぐ下にため池が二つあり、その土手に立って下界を眺める。のどかな大和盆地がひらけ、緑のこんもりとした古墳が点々と見える。どんどん下って行くうち、誰からともなく「えー？」という声があがる。目の前に迫ってくる、瓢箪を二つに割ったような形の小山は、あの箸墓ではないのか？　地図音痴で、方向音痴の私達は、タクシーで移動した

ことも手伝って、箸墓から出発して箸墓の真裏へ舞い戻って来ていることが、まるっきりわかっていなかったのだ。一瞬キツネにつままれたような気持ちで、ポカンと箸墓を見つめていた。そのうちじわじわと、何ともいえない喜びというか、不思議な感動が押し寄せてきた。

「これは、卑弥呼さまが私達を呼び戻したにちがいない」と狂喜して走るように箸墓に向かって突進。

「ちょこっとかすったような廻り方をせずに、ぐるりと一周して帰りなさい、ということなのよ」などと真面目くさって頷きあいながら、箸墓の後方を半周ほどした。三人とも満足しきって、心ゆくまで卑弥呼さまにお別れを言って、巻向駅に向かった。

近鉄の電車を乗り継いで奈良へ、そしてその日の宿『春日野荘』へたどりつく。女三人、ビールに舌づつみを打ちながら、卑弥呼だ、額田女王だ、なんだかんだで、奈良での夜は更けていく。今夜は七夕、この雨で、牽牛と織姫さまはデートもままならなくてかわいそう……。

二日目。朝からザアザアと本降り梅雨の時期に旅に出たのだから仕方ないか。近鉄奈良駅から天理駅へ。そしてタクシーで石上神社へ。うっそうと茂る大樹の森の中、辺りは静寂に包まれていて、三人とも厳かな気分になって神妙に境内へ入っていく。石上坐布留御魂神社、俗に「フルの社」と呼ばれていて、祭人は神剣フツノミタマ。剣を御神体とする武勇の神が祭られている。創建は崇神天皇の時。

石上　布留の神杉　神さぶる
恋をもわれは更にするかも

ここには、柿本人麿呂の詠んだという石上振の神杉の歌が残されていて、Tの解説を恭しく拝聴する。

境内の奥に細い道が続いているようで、『山の辺の道』という小さな立て札が見える。そちらへ行きかける私を見て、Mがあわてて社務所へ飛んで行き、その道は行かない方がいいと言われたからと、必死で私を止める。これぞまさに山の辺の道なのに、と残念がりながらも、止めてもらった私も実のところホッとしている。昨日のような、薄暗い雨の山道を思い出したら、ちょっとしり込みをしたくもなる。

というわけで、結局タクシーで石上神社を後にし、国道沿いの食堂で昼食。予定では、有名な茶粥定食を『弓月庵』で食べることになっていたのだが、残念ながら、月曜日は定休日だったし、タクシーの運転手さんの話では三ケ月前よりの予約が必要とかで、あきらめるしかない。

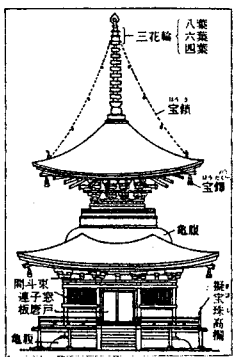
今度はバスで長岳寺へ向かう。根上がりの松のある肘切門から入って広い境内を登っていく。九世紀に弘法大師が開いた寺で、仏像、建築、石仏のどれも見ごたえがあった。庫裏で抹茶をいただく。こういう時は三人とも神妙にうなだれるのだ。

今日初めて、自分達の足で山の辺の道に踏み入る。矢印に沿って野辺の道をポクポクと歩いて行くと、すぐに崇神天皇陵に着いた。どこが正面なのかと言いながら、左回りに、こんもりと茂った森と、深々とよどんだ堀を見ながら歩いてみた。崇神天皇ってどんな天皇だったのかなと思う。ちらっとよんだ『日本書紀』によると、他国からやってきて三輪地方を占領したが、人民がなかなか受け入れてくれないので、一度は追放した大田田根子を呼び戻して三輪の神をまつらせ、それでやっと国を治めることができたという。では、崇神天皇はどこから来たのか。朝鮮半島から渡来して来た騎馬民族の長で、征服王朝を大和に樹立したのだという説があるが、私はこの説に胸が踊る。反論も多いらしいが、学者ではないのだから、自分の一番気に入った説を受け入れればいいのだと思う。そして、夢とロマンを思いきりふくらませればいいと思っている。そこが古代史の魅力ではないのかな。

大きな陵をほとんど一周してしまった。右に廻っていたらすぐに正面だったのに……。これも崇神天皇が私達を一周させようとして、左へ呼んだのかもね、と、ちょっと神がかり的になってしまった私達。

昨日の箸墓といい、この崇神天皇陵といい、やはり大和路には、何か目に見えない大いなる力のようなものがあるぞ、と実感した旅だった。負け惜しみではなく、雨が大和路の魅力を倍増してくれたような気がする。山の辺の道だったからこそ、雨という演出が心憎いばかりに効果的だったとも言える。

すっかり雨のあがった帰り道。ちょっぴり淋しさも味わいながら、それでも、もう次回の奈良への旅に思いを馳せつつ、満ち足りた気持ちで大和路に別れを告げた。



略奪暴力をほしいままにし
風の如く行方をくらました

# 刀伊の正体は何者であったか

柿本　光明

「この世をば　わが世とぞ思う
望月の　かけたることも　なしと思へば」　平安時代は、貴族による政治の時代であった。

その貴族の中心に立ったのは、藤原氏である。藤原氏は、天皇の外戚となり、他の貴族を排除して摂政・関白の地位を独占し、多くの荘園を集めるなど、わがものとしながら力を強めた。そして藤原道長のころになると、栄華の極みを誇るようになっていった。このように平安貴族は荘園などからの収入で生活には心配なく毎日を形式的な儀式や行事に明け暮れて過ごしていた。

これに比べて、地方の住民は、地震・台風・洪水などの天災に苦しめられ、伝染病が大流行して多くの死者をだすなど、また、壱岐・対馬をはじめ北部九州では、新羅人・南蛮人・正体不明の賊などの侵入事件が頻発して混乱が続いていた。

しかし、太平の夢をむさぼる平安貴族にしてみれば、遠い九州のできごとなどには無関心である。このようなとき、壱岐・対馬・北部九州には最大の外敵の来襲があった。

文永の役（一二七四）・弘安の役（一二八一）は史書によくみられるが　それより二百五十年も前の寛仁三年（一〇一九）三月二十七日、賊船五十余隻が突如として対馬に来襲した。当時、日本側ではこの賊の正体がわからず、賊船とよんだ。

この賊船はどこから来たのか、侵略のねらいは何か。わからないまま大さわぎとなった。賊は対馬であばれまわり、島の各地で放火・殺人をくり返し、その被害は対馬全島におよんだ。

殺された者や捕えられた者は、合わせて三百八十二人、対馬で重要な産業であった銀鉱山も焼き払われ、対馬守遠晴は、命からがら太宰府に逃れ、長峯諸近が捕まったのもこの時である。

つづいて賊船は、壱岐島の北西海岸に卸し寄せてきた。おそらく、湯ノ本湾に入り片苗湾一帯から上陸したのであろう。

賊船は、八尋から十二尋（平均十五メートル前後）で櫂が一船に、三、四十ほどついて、非常に速く、五、六十人が乗り組んでいたといわれるから、約三千人の大集団である。島に上陸して合戦になると、百人が一隊となり、前陣の二、三十人が刀をふりかざして切り込み、後陣の七、八十人が弓や盾を持ってつづき、このような集団が二十隊ほど編成されていた。矢は四、五十センチほどで盾をも射通すほどの貫通力がある。

賊は、山野を駆けめぐり、牛馬や犬を殺して食い、手当たりしだいに人を捕え、老人子供は斬殺し、壮年の男女は船につれこみ、穀物をうばい、民家に火をつけ焼くという、悪魔のような乱暴をはたらいた。

このような賊の集団戦法に圧倒され、壱岐守藤原理忠をはじめとする手兵もことごとく戦死した。壱岐勝本町立石南触には軍場とよばれる丘があり、立石仲触には布代城跡、そして近くには藤原理忠の記念碑や千人塚があって、賊との激戦があった古戦場であると伝えられている。また、軍場の辻の叢林の中に積石塚があり、これが理忠の墓と言われ、その積石には自然石が多く、なかには小形宝篋印塔の一部もあり、かなり古い塚であると推定できる。

また、嶋分寺（国分寺）の常覚講師は、島内の寺院の総括責任者として、四月七日に太宰府に「私も十六人の法師とともに襲いくる賊徒と必死に戦い、三度までは退けたが、数百の数には耐えきれず、一人で脱出してきた」と報告している。この戦いのとき、嶋分寺は全焼した。

このときの壱岐での被害は、壱岐守理忠をはじめ百四十八人（うち男四四人、法師十六人、童二九人、女五九人）が殺され、捕虜となって連れ去られた女など二百三十九人、このほか焼かれた人家、食い殺された牛馬などは数知れないほどで惨たんたる状態であった。生き残った人は諸役人九人、郡司七人、百姓十九人の合計三十五人にすぎない。この被害の数字は、島全体と考えるより戦場となった地域だけではないかと思われる。それにしても壱岐がいかにひどい大損害をうけたかがわかる。

さらに賊は、捕えた対馬・壱岐の島民を乗せたまま南にくだり、四月七日には、筑前国の怡土郡・志摩郡・早良郡を襲い、民家を焼き、住民を連行した。これに対し、志摩郡の文屋忠光が急ぎ派遣された兵士とともに応戦し、敵を数十人倒して撃退した。翌八日には、博多湾の能古島に来襲し、多くの島民が捕らえられたが、これに対して、前小監大蔵種材・藤原明範らが応戦し、権師の藤原隆家もみずから兵を率いて、士気を鼓舞している。

九日の朝、賊は博多に上陸して警固所を焼こうとしたが、激戦が展開

された。このとき「馬をかけて射よ臆病になるな！」と賊船に捕えられていた壱岐・対馬の者たちの叫び声が聞こえ、これで気をとり戻した日本側は、一斉射撃に出たが、矢は敵の半分しか飛ばなかった。ところが、日本の鏑矢のうなりが敵に恐怖感を与えたようで、敵に動揺がおこりそのすきに、捕らわれた人々は海に飛び込んで脱出した。しかし、賊はふたたび上陸し筥崎宮を焼こうとしたが撃退され、能古島に引き上げた。

翌十日と十一日は、強い北風で海は荒れて戦闘は中止し、この間に大宰府は急いで兵船三十八隻を集めた。

十二日は、志摩郡船越津に上陸しはじめたが、すでにこの地にも大宰府の精兵が派遣されており、四十余人の賊を射殺し、二人を生け捕りにした。

十三日、賊は肥前松浦郡の村々を襲ったが、ここでも、肥前の前介（前の次官の意）源　知が兵士を率いて防戦し、賊は海上にその姿をけした。しかし、賊は三月二十七日より四月十三日まで、対馬、壱岐を始め北部九州沿岸を、荒し回ったのである。その被害総額（右大臣藤原実資の日記『小右記』による）は殺された男女六百数十人、捕えられた男女千二百数十人の日本人が犠牲になり、三八〇頭の牛馬、焼かれた民家、このほか数字に現われない損害を入れると莫大なものになる。なかでも国防の要となる壱岐や対馬がかいめつ的打撃をうけたことは、かつてない国難であった。

さて、突然に壱岐・対馬を襲い北部九州各地で掠奪暴行をほしいままにして、風のごとく行方をくらましたこの異賊は、いったい何者であろうか。当時、大宰府でも、この賊船の正体がわからず、ただ刀伊の賊とよんでいた。これはおそらく高麗人捕虜のことばをそのまま用いたもので、ほんとうの正体はわからなかった。刀伊とは高麗語で蛮夷を意味し、この戦いで捕虜とした三名は、いずれも高麗人であり、彼らは、高麗国が刀伊の侵略を防ぐために国境方面に派遣されていて、逐に刀伊につかまったと申しており、大宰府にはこれに対する何の資料もないため半信半疑の状態であった。明確になったのは賊が日本を去ってから四カ月後である。対馬判官代、長峯諸近の報告があってからである。

長峯諸近は、対馬の国衙の役人で刀伊が対馬に来襲したとき、彼は母妻子、従者などと賊に捕らえられたが、賊船が帰る途中、ふたたび対馬に寄ったとき　ひとり脱出し島に帰ったが、賊船に連れ去られた母や妻子のことが心配でたまらず、六月十五日夜、ひそかに小船で高麗へ渡航した。そこで通事（通訳）の仁礼と会い、こんどの事件の結過を聞くことができた。

仁礼の話によれば、刀伊はまず高麗沿岸を荒しまわり、その後、日本へ向かったので、高麗では兵船を集結し、刀伊の帰路を待ちぶせていたところ、ほどなく刀伊の賊船が帰って来た。これを五カ所で迎え撃ち、全滅させた。その賊船には多数の日本人捕虜がいたので、これを救出し五カ所のうち三カ所で三百余人を救出した。さらに二カ所からも日本人を集めて、近く日本へ送還するところであった。諸近の母・妻・妹らもすべて殺され、残ったのは伯母一人だけだった。こうして諸近の調査は悲しい結果に終わり帰国しようとしたが、密出国していたので、このままだと帰国したら処罰されることに気ずき、救出された日本人のうち十人だけを生き証人として連れ帰った。

大宰府ではさっそく諸近から詳細な事情を聞き、これに同行の女、内蔵石女、田治比阿古見の二人の女性の報告をそえて、太政官に提出した。

長峯諸近や石女らの悲惨な報告で大宰府は初めて、刀伊の正体が判明した。そして、刀伊は遠い沿海州の蛮民であり、高麗が徹底同に撃破してくれたので、二度と来襲することもあるまいと、大宰府も、都も、ほっと胸をなでおろしたことだろう。

ところが、死を決して単独で調査をし、賊の正体と捕虜の消息を報告した諸近には、渡海の禁を破った罪人として禁固刑にし、都の処置を仰いでいるが、都からどのような指示があったかは不明である。また、大宰府は、すぐに戦功者の恩賞を申請したが、都の公家たちは形式的な論議ばかりで、結果は、老体の大蔵種材を壱岐守に任じた以外になにの記録も残っていない。この頃の中央政府が九州などの地方政治に対しいかに無関心であったかがよくわかる。

また、この事件後にも異賊の侵入はくりかえされ、それは朝鮮海峡をへだてた国境の島としての壱岐・対馬のもつ苛酷な宿命であったかも知れないが、たび重なる外冦で、田畑を荒らされ、家は焼かれ、肉親を奪われる島民の悲しみは、単に宿命としてかたづけるには、あまりにも残酷な事件ではないだろうか。

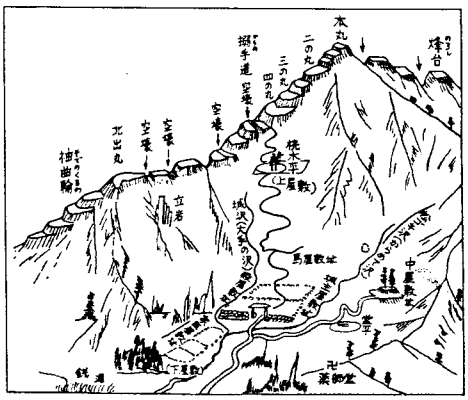
※参考文献
『壱岐郷土史』一～三
壱岐郡小学校教員会　昭八

〔十二月徒歩例会〕

## 『水呑町の史跡めぐり』

### ～旧鞆街道を歩く～

〔日時〕十二月八日（日）
午前八時三十分
〔場所〕福山駅前釣人像前集合
現地集合の場合は午前九時
水呑町農協前集合
〔講師〕田口義之会長
小林定市氏
〔会費〕五百円
〔解散〕午後四時現地解散予定
※小雨決行、お弁当・飲み物持参
※定員はありませんが、資料準備の都合上、参加希望の方は事務局まで申込をお願い致します。




## 事務局だより

旅に、読書に、
スポーツに、グルメに、
とても良い季節になりました。
会員の皆様は、
いかがお過ごしでしょうか。

この良き季節に備陽史探訪の会では、城郭部会主催の「矢筈城登山の会」、歴民研主催の「加茂町の石造物分布調査」、徒歩例会「水呑町の史跡めぐり」等の多彩な行事を用意しております。会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご参加下さい。よろしくお願いいたします。尚、各行事の詳細につきましては、本会報の行事案内にてご確認下さい。

また、恒例の「古墳講座」・「古事記を読む」・「備後古城記を読む」にも多数のご参加をよろしくお願い致します。

季節の変わり目です。お風邪など召されないよう、お体をご自愛ください。

役員一同

## 事務局日誌

。八月三日（土）古墳講座
「備後の主要古墳」参加十三名
。八月十日（土）特別郷土史講座
『備南の前期古墳』
（県立歴史博物館共催）
〔講師〕
広島大学助教授　古瀬清秀先生
〔会場〕県立歴史博物館講堂
〔聴講者〕約百名
終了後、リオで恒例の夏期懇親会を開催。参加者、四十名。
。八月十七日（土）中世を読む会
「備後古城記を読む」参加十二名
。八月二十四日（土）
「古事記を読む会」参加二十三名
終了後、会報七十二号発送作業
。九月七日（土）古墳講座
「備後の主要古墳」参加十二名
終了後、九月例会資料作成作業
。九月八日（日）
九月例会バスツアー
「井原・笠岡の史跡巡り」
〔講師〕七森義人・後藤匡史
〔参加〕七十六名
双つ塚古墳の墳丘に感激し、但し、長い山道で少々ばて気味……
。九月十四日（土）
「古事記を読む」参加二十二名
。九月二十一日（土）中世を読む会
「備後古城記を読む」参加十五名
同日午前十時、鞆公民館に於いて広島県郷土史研究協議会の大会。主管団体の一つとして会長以下九名参加
。九月二十八日（土）
第九回郷土史講座
「毛利氏の備作進出と豊臣秀吉」
〔講師〕出内博都
〔参加〕二十名
。十月五日（土）古墳講座
「備後の主要古墳」参加十名
終了後、行事案内の発送、及び一泊旅行の資料作成作業
。十月十二日（土）
「古事記を読む会」参加二十一名
。十月十九日、十月十二日
平成八年度一泊旅行
「西の京山口の旅」
〔参加〕四十六名
。十月二十六日（土）
第十回郷土史講座
「瀬戸内海沿岸部の古墳について」
〔講師〕山口哲晶
〔参加〕十六名
同日夜、中世を読む会
「備後古城記を読む」参加十名

## 今後の行事予定

※特に断わりのない場合、会場は福山市中央公民館（花園町）

〔古事記を読む〕
〔日時〕十一月九日（土）
午後二時から
〔場所〕中央公民館
〔会費〕資料代百円程度

〔備後古城記を読む〕
〔日時〕十一月十六日（土）
午後七時から
〔場所〕中央公民館
〔会費〕資料代百円程度

〔古墳講座〕
〔日時〕十二月七日（土）
午後二時から
〔場所〕中央公民館
〔会費〕資料代百円程度

## ★会報七四号の原稿募集

『備陽史探訪』七四号（十二月七日発行予定）の原稿を募集します。内容は自由ですのでふるって応募してください。字数は「氏名とタイトル」は別で本文を「タテ十六字×一二〇行」以内でお願いします。

なるべく多くの方の原稿を掲載したいと考えていますので、原稿は一人一本、字数厳守でお願いします。

## 新入会員紹介

### 備陽史探訪の会へようこそ

会報七二号の「新入会員紹介」に一部誤りがありました。お詫びすると共に、訂正して本号に再度掲載させて戴きます。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

## 事務局からのご案内

今年も早残すところ約二か月となり、当会の年末恒例・特別郷土史講座アンド忘年会の季節がやって参りました。

〔特別郷土史講座〕
〔講師〕
広島県立歴史博物館
草戸千軒町遺跡研究所所長
松村昌彦氏
〔テーマ〕
「江戸時代の和鏡について」
〔日時〕十二月十四日（土）
午後三時三十分～五時三十分
〔場所〕福山ワシントンホテル
〔会費〕無料

特別郷土史講座に続けて、恒例の忘年会を行います。

〔忘年会〕
〔日時〕十二月十四日（土）
午後六時～八時
〔場所〕福山ワシントンホテル
〔会費〕七千円

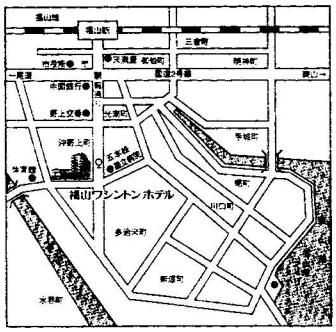
※午後三時に福山駅北口より送迎のバスが出ます。

※郷土史講座、忘年会のみの参加も歓迎します。ふるってご参加ください。

**※忘年会の出欠は同封の返信用ハガキで十二月七日までにお願いします。**

### 福山ワシントンホテルご案内図

〒720　福山市沖野上町5丁目27番11号
電話(0849)22-5511番




## 編集後記

初めて会報の編集を担当させて戴きました。盤座亭主人さんのご苦労が、少しは理解できたように思います。入会して約一年と四ケ月、少しは顔みしりの会員の方々も増えてきました。主に編集者の好みから城郭研究部会の活動に参加してきましたが、来月から始まる民研の「石造物分布調査」には参加してみようかと考えています。見かけたら、気軽に声をかけて下さい。特徴は、ずんぐりっくりの胴体に満丸い顔が乗っています。てっ、おそらく最大の特徴は年配の方の多い当会の中では最若年に属することだと思います。と言っても、三十代半ばですが。

次号の編集も担当しますので宜しくお願いします。編集者の個人的好みですが、中世備後の国人衆に関する原稿を戴ければ幸いです。宜しくお願いします。

（遵行使節　沙弥）

備陽史探訪の会事務局　〒七二〇
福山市多治米町五－十九－八
☎〇八四九（五三）六一五七